

R3 年度第 2 回エゾシカ・ヒグマWG 指摘事項と対応 (エゾシカ関係)

次期計画案に対する指摘事項※	修正案	該当頁
<p>□【石川委員】 p.6 の「各地区の総括」、「b.特定管理地区 (知床岬地区)」の二段落目に「森林植生にも」とあるのは、「森林植生には」だと思ふ。その上で、草原植生は「一部で回復傾向が確認されている」が、森林植生については「目立った回復傾向は認められていない」と記載されている。しかし、p.10 の「2-2 特定管理地区 (知床岬地区)」の「地区の現状」を見ると、森林植生について「かつては樹皮剥ぎにより～大量に枯死」していたが、第 2 期計画期間終了時までには「林床植生については構成種が大きく変化」し「やや回復傾向にあることも確認」され、「第 3 期計画期間中にはこれら回復傾向の鈍化も確認」されたと記載されている。森林植生の回復は遅いと認識しており、我々としても悩ましいのだが、「地区の現状」の記述の方が正しいと感じるので、総括の書きぶりは「回復傾向はわずかに認められるものの、非常に緩やかである」といった内容に修正すべきである。</p> <p>□【宇野座長】 p.6 の記述を、p.10 の記述に準じて修正していただきたい。</p>	<p>草原植生は、第 2 期計画期間終期までに一部植生で回復が確認されており、その後、第 3 期計画期間中の回復段階は維持されている。<u>森林植生は林床の一部で回復傾向がわずかに認められるものの、草原植生に比べ回復は非常に穏やかである。</u></p>	<p>p.6</p>
<p>□【伊吾田委員】「地区の現状」における目標生息密度について、特定管理地区 (知床岬地区) は 10 頭/km²以下で、エゾシカ B 地区は 5 頭/km²となっている。このように区別した理由や背景を記載した方がよいのではないか。具体的には、資料 4 に記載されていたような面積、捕獲の制約、捕獲に係るコスト等をこちらにも記述したらよいと思うが、いかがか。</p> <p>□【宇野座長】記載する場所は、p.10 の「地区の現状」でよいか。「管理目標」の項にあまり細かく書き込むよりは、現状として示した方がよいように思うが、どうか。</p>	<p><u>f：本地区への移動手段はほぼ船又は航空機に限定され、ヒグマとの遭遇リスクもあるなど、捕獲作業の制約が大きい場所であることを踏まえて安全かつ効率的な対策の検討が必要である。</u></p>	<p>p.11</p>
<p>□【山中委員】知床岬地区は、最も生態系の維持に配慮すべきエリアである。その知床岬地区における数値目標が 10 頭/km²以下で、B 地区や、後ほど説明があるだろう隣接地域で 5 頭/km²というのは、バランスを欠いているという印象が拭えない。中長期目標なのだから、知床岬地区も 5 頭/km²以下でよいのではないか。計画の全体を眺めたときに、違和感を覚える。</p> <p>□【梶委員】前回の WG で 5 頭/km²の議論があった。1980 年半ばにシカの影響が急速に広がったのは、5 頭/km²を超えてからだ。増加時のインパクトと減少時のインパクトは異なるので、アッパーリミット</p>	<p>エゾシカの越冬期に実施する航空カウント調査による先端部 3.2 km²におけるエゾシカ発見密度を、<u>中長期的には森林更新が可能とされる 5 頭/km²以下を目指し、第 4 期計画期間中は実現可能性を</u></p>	<p>p.11</p>

<p>の考え方を基に目標生息密度 5 頭/km²としている。何を目標とするかは、何を「適正状態」の指標として用いるかによる。森林更新頻度を指標にするのであれば、5 頭/km²は妥当であると考え。</p> <p>□【宇野座長】将来的に達成すべき中長期目標は植生への影響を考慮して 5 頭/km²としてきた。そのことを管理計画のどこかに盛り込み、次期計画期間内に達成すべき目標としては「実現可能性を踏まえて 10 頭/km²とした」としたらよいだろう。</p>	<p>踏まえて 10 頭/km²以下とする。</p>	
<p>□【間野委員】隣接地域における管理目標は、p.15 に書かれている「採食圧の軽減」と「地域住民との軋轢の緩和」、この双方を考慮して 5 頭/km²とした、当面は現状を維持するという意味合いから 5 頭/km²以下という目標を変える必要はないことは理解した。ただ、従前からの目標として漫然と記述が引き継がれていくのではなく、いま議論されたようなこと、何を背景としてこの目標値になったかがきちんと理解された上で記載されるとよいのではないか。</p> <p>□【宇野座長】「地域の現状」の項に、合意形成を経てこの数値となったということがわかる文言の加筆をご検討いただきたい。</p>	<p><u>k：遺産地域内の採食圧の軽減と併せて、生活圏でもある隣接地域の産業等と調和したエゾシカ密度の合意形成を図るため、現状の発見密度を当面の目標と設定し、柔軟な個体数調整を検討する。</u></p>	p.15
<p>□【日浦委員】p.17 の表 1 についてコメントする。「広葉樹林」の項の「植生としての回復」の欄に「安定的な更新」とある。広葉樹林というのは、自然な状態でもなかなか安定的な更新をしないので、この表現はやめたほうがよいように思う。第 3 期の管理計画でも同じ表現だったので、今さら変えるのはどうかとも思うのだが、過去の齢構成を調べたような研究事例を見ても、広葉樹に関しては数十年とか、ともすると百年に一度くらいしか更新していないといった事例も多くある。よりシンプルに「稚樹をモニタリングする」でよい。</p>	<p>指摘を踏まえ修文 (計画案中、表 1 参照)</p>	p.18
<p>□【梶委員】p.18 の表 3 と p.19 の表 4 の表現について確認したい。まず表 3「第 4 期における植生指標の評価の考え方」の「管理への反映(イメージ)」の欄で、「個体数調整の収束を検討」とある。これは IUCN からの投げかけに対する反応の一つだと理解するが、密度が下がって手を緩めれば元に戻ることは明確だ。今は事業として個体数調整を実施しているわけだが、いずれは低密度を低コストで維持する仕組みが必要になる。要するに、表 4 の「低密度維持のための捕獲継続又は経過観察」、これをど</p>	<p>指摘を踏まえ修文 (計画案中、表 3 参照)</p>	p.19

<p>うするかだ。例えばヨーロッパでは国立公園内での狩猟は普通に行われている。訓練された特定のボランティア組織を維持する、現状のように知床財団を中心とする専門的捕獲者を投入するといったことが考えられるが、持続的・長期的に捕獲可能な方法が必要だ。</p> <p>□【宇野座長】今の梶委員のご意見を踏まえると、表3の「個体数調整の収束を検討」という表現を改めて「持続的なシカ個体群の低密度状態の維持」といったものにすべきだろう。それをどのような体制で行っていくか、議論が必要だろう。</p>		
<p>□【石川委員】植生回復の指標種について、今この場で詳細を協議するつもりはないが、意識の共有を目的として申し上げる。表2に指標種例として多数の植物種が記されている。現地には私も何度か同行しているが、業務発注や入札・契約を経て調査は夏になることが多い。しかし、「嗜好性：大」「頻度：低」の欄に書かれたエンレイソウ類などは夏では開花が確認できず、上手くモニタリングできていない。このことは以前から課題として何度も申し上げているのだが、発注者である環境省も林野庁も担当者が2~3年で異動するので、情報が寸断されるというか、引き継がれていないと感じている。時々、知床財団の方が初夏に知床岬に行って「エンレイソウが咲いていた」という情報を提供してくれるのだが、定期的なモニタリングの仕組みとなっていない。時期的なことに十分配慮し、発注前であっても関係者が協力して情報を得られるよう、仕組みとして構築していただきたい。</p> <p>□【宇野座長】夏の1回だけでは、ここに記された指標種例のすべてについて開花を確認することはできない。このことを課題として共有していただきたい。植生指標検討部会では、モニタリングは10年に1度という案が出たこともあるが、10年後では顔ぶれも変わって体制が維持できないだろうということで、計画上は5年に1度として案を示していただいたという経緯がある。</p>	<p>(表2下※文)</p> <p>過去の調査結果も基に、簡易指標種調査(開花数カウント調査)において指標種として適性があると考えられる種名を例示。実際の適性やエゾシカによる影響への反応の早さについては、植生群落のタイプや変遷の履歴等に依存して変化することに留意。また、<u>モニタリング調査の時期は、各種の開花時期を考慮。</u></p>	<p>p.19</p>

※令和3年度第2回エゾシカ・ヒグマワーキンググループ議事概要より